

「箱崎における“絆”の社会学的考察」

キーワード：地域，コミュニティ，インフォーマル組織，連帯，疎外，社会化

人間共生システム専攻
入部 千鶴

1. はじめに

九州大学は、その名称や形態を変えながらも約100年近く福岡市東区箱崎の地に存在し続けている。しかし現在、九州大学の元岡地区への移転が進められており、大学は中心となっている六本松地区・箱崎地区から去ろうとしている。

九州大学のキャンパスの周囲には、これまで九大生や九大職員など関係者を対象として営業を続けてきた多くの飲食店や銭湯、写真館などがある。特に最もその歴史が長い箱崎地区には古くからある店が多く、その学生街としての姿は、箱崎というまちの大きな柱の一つとなっている。しかし、移転をむかえて、まちは大きな変化の局面をむかえている。理系学部/学府の移転が進むにつれて、コンビニや長く続く店の入り口に閉店を告げる張り紙が目立つようになったのだ。

また、伊都キャンパスへ移転を終えた学生たちからは、「学校はきれいで設備も整っているが、なにか寂しい」「箱崎へ戻りたい」という声が聞こえてくる。学生にとって地域が果たす役割というのは、ビジネスとしての関係だけではないのではないだろうか。学生との関連において地域のもつ社会的機能を浮き彫りにし、その必要性と課題を探りたい。

2. 地域コミュニティとしての<箱崎>と“絆”

九州大学にはいくつかのキャンパスが存在するが、本論文では、歴史が長く、その立地や利便性、学生の居住年数などをみても、九大生と地域との関連を考えるのに最も適していると思われる箱崎地区について考察を進める。ここで論文の趣旨に基づき、行政区分とは異なる学生の生活世界としての<箱崎>という独自の地域設定を行った。

人口・世帯数・人口構成などの点からみても、九大生は<箱崎>のまちに大きな影響を及ぼす要因であり、それらの他地区への流出は大きくまちを変化させる。次々と閉まっていく飲食店やアパートの空室の増加は、その変化を如実に表している。

地域には、この変化の波の中でそのまま放っておくと消えてしまうものがある。それが、人々が地域あるいは

町に惹かれる理由、消えてしまうと寂しいと思う原因なのである。そして、それが現在の<箱崎>から失われつつあると考えられる。この論文ではそれを主に地域コミュニティで生みだされ引き継がれている“絆”ではないかと想定し、その“絆”に着目していく。また、今回<箱崎>という学生街で強く喪失感が感じられていることから、学生と地域の間に生まれる“絆”とその意義について考察していく。フィールドワークによって、地域でどのような“絆”が形成されているのか(あるいは形成されていないのか)それはどのような過程を経て生じているのか等を明らかにしていきながら分析を進める。

3. インフォーマル領域への視点

1924年から1932年にかけて行われたホーソン実験で、E.メイヨらはインフォーマル組織を発見した。それまで、組織を効率的に目標達成するためにはより合理的な科学的管理法が最も役立つとされていた。しかし、4段階の実験を経て、フォーマルに配置された集団のなかにも自然発生的にインフォーマルな組織が形成され、かつその集団の生産性や作業能率を左右するのはインフォーマル組織であると判明した。

本論文では、このようなインフォーマルな領域への視点をまちの変化に対しても適用する。従来、行政・商店街・地域住民など、地域を構成するいくつかの要素が地域問題に対してそれぞれの取り組みを行っている。その内容は多種多様であるが、いまだ完全なる解決には至っていない。それらの取り組みの特徴として、学校の授業やキャンパスでの生活、企業・商店街の営業といった昼間の世界(フォーマルな領域)ともいえる部分に焦点を当てたものがほとんどであることが挙げられる。そこで、それ以外のいわばまちの夜の世界(インフォーマルな領域)に目をむけて、フォーマル/インフォーマルな領域に属する組織・集団をそれぞれフォーマルグループ/インフォーマルグループと名付け、インフォーマルグループに着目しながら地域の機能をみていく。

<箱崎>におけるインフォーマルグループを代表するものとして、特に人々の喪失感が表れやすい居酒屋や定食屋などの飲食店を設定する。これら飲食店では、人々

は匿名性と(立場の)自覚という一見相反するものを手に入れ、彼らにとって日常的空間とは違った自己表現を行える場、無意識的に自己を見つめなおす場となり得ると考えられる。また、同時に店への愛着、地域への愛着というものが形成されやすい場でもある。

4. インフォーマルグループの機能

<箱崎>にある飲食店の中から「将門」と「花山」を選んでインタビューを行い、九大生とのエピソードや移転についての影響などを聞いた。また、<箱崎>に根付く飲食店のもつ機能を比較するためにも、もうひとつの主要キャンパスである六本松の周辺に長年ある「ほろ酔」という定食屋にも聞き取りを行った。

同時に、実際にインフォーマルグループ内での付き合いや関わりがどのように学生に働いたか、どんな影響を及ぼしたかを検討するために、学生側にも聞き取りを行った。ここでは、九大を卒業し、社会人になった30代・40代の男性5名、工学府に在籍中に箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転を経験し、現在は東京で働いている卒業生、移転後も箱崎に残る文系学府の大学院生という3タイプの九大生・卒業生を対象とした。

これらの聞き取りを通していくつかの地域コミュニティにおけるインフォーマルグループの役割が明らかになり、それらを大別していく。

社会化(socialization)の担い手

社会化は大別して 形式社会学の中心概念として、諸個人の相互作用により、集団や社会が形成され可能となる過程(Vergesellschaftung, sociation)、生産(活動)や育児などの事象が、私的な形態から社会的・共同的なものへと変えられること(Sozialisierung)、個人が他者との相互行為を通して、諸資質を獲得し、その社会(集団)に適合的な行動のパターンを発達させる過程、つまり人間形成の社会的な過程(socialization)という三つの意味で用いられる。ここでいうインフォーマルグループの機能は の意味で、この社会化には第一次社会化、第二次社会化、予期的社会化というものがある。

インフォーマルグループである飲食店では、たとえば食事時のマナーや生活態度を店主や居合わせた社会人、あるいは他の学生が指導することがある。また、それだけではなく、先輩が叱咤激励しながらも食事をおごり後輩を育てるといった暗黙のルールが形成され、言葉はなくても自然と後輩たちに引き継がれていくという一種のしきたりも生まれている。このように、インフォーマルグループのいわば教育機能ともいえる働きによって、学生らは無意識的に第二次社会化を経験している。

連帯感の構築

K.マルクスが問題とした疎外は、現代ではその社会的背景の変化に応じて少しずつ姿を変えており、当時の議論をそのままに適用するわけにはいかない。しかし、現代においても自己の喪失、不安、混乱、孤独感、帰属感の欠如といった形で疎外は存在している。

学生においては、孤立感という形で疎外が生じやすいと思われる。学生は大学進学に伴って家を出る場合が多く、その際突然に血縁からも地縁からも距離をとることになるからである。また、目に見えたなにかを生み出すことのない学生は、資本主義社会の生産と労働という構図に本質的には組み込まれない。このとき、学生のなかに自己疎隔が生じることも考えられる。

このような色々な疎外を克服するためには何らかの連帯感をもつことが有用となる。その連帯を感じる手段としては様々あるが、インフォーマルグループにも学生にとっての連帯感を構築する機能があることが認められた。家庭的な雰囲気と接することや、地域の人に認められている、応援されていると感じることによって、他者および社会との連帯を獲得していくのである。

また、<箱崎>のまちには、学生街としての側面のほかに門前街としての側面もある。九州大学とともに、千年以上の歴史をもつ筥崎宮が、その大きな柱の一方を担ってきたのである。そして、これまで長い間その筥崎宮で行われる数々の祭りに間接的に九大生が関与してきた。忙しくなる周囲の飲食店に、日頃お世話になっている九大生やサークル・研究室の先輩から代々引き継いだ九大生が、アルバイトあるいは手伝いとしてやってくるのだ。まちの人々はその間接的な文化継承の重要性をすでに認知している。地域コミュニティのなかで必要とされることは認められているという実感を生み出し、連帯感の構築のひとつの回路となる。

ナナメの関係

大学に入った学生、とりわけ家族という集団から離れた学生は、学内でも学外でも、先生・先輩・後輩という“タテの関係”、同級生・友人という“ヨコの関係”という上下左右の構図に組み込まれることになる。しかし、学生と飲食店の店主たちとの関係はそれらとは一寸異なる“ナナメの関係”を形成しているといえる。

“ナナメの関係”とは友人関係のような“ヨコの関係”とも「褒め 褒められ」「叱り 叱られ」「教え 教えられ」る“タテの関係”とも異なる。年上でありながら本人と同じ目線にたつこともできるような人間が“ナナメの関係”を担うのである。その立場から、親や仲間とは違う形で知識や人間関係、人生観のようなものを教えた

りアドバイスをしたりすることができる。しかし、このような関係を築ける相手は、核家族化や競争社会の激化により減少している。タテとヨコの世界で生きてきた青年のなかには、社会に出たとき他者との距離感や関係作りに戸惑う者も多い。それを解決するために飲食店で構築される店主や社会人との“絆”が役立っている。学生にとってインフォーマルグループは必要不可欠な“ナナメの関係”を結ぶことができる数少ない場なのである。

全体を通じて、インフォーマルグループには循環的な“絆”“愛着”の形成システムが存在していること、インフォーマルグループで結ばれる“絆”には多様性があり、極めて大きな広がりを見せていることが判明した。

5. 地域コミュニティの再生にむけて

さまざまな役割を果たしているにもかかわらず地域コミュニティが縮小しつつある現実を前に、どこにその原因があるのか課題を探る。かつ、これからの地域コミュニティと地域への取り組みのあり方を提示する。

《地域コミュニティのもつ課題》

1) 自覚と役割認識

飲食店にはビジネスとして以外の重要な機能がいくつか発見されているにも関わらず、地域の縮小に対して、インフォーマルグループはあまり主体的に関与しようとしていない。当事者であって当事者でなくなっている。しかし、地域に根付いた飲食店がなくなるということは、経営者だけの問題ではなく、多くの学生たちにとって、人との/地域との/社会との連帯および紐帯を生みだす場、E.フロムのいう活発な討論を行うことで互いに信頼関係を作り、知識を共有する「面接集団 (face-to-face group)」としての場を失わせるということでもある。いくつかある地域の構成要素が、それぞれ自らが果たす役割を認識したうえで、地域コミュニティに主体的に関わっていくことが必要となる。

2) サステナブルな地域力

地域コミュニティに含まれる要素が変化したり無くなったりすることは、どの地域、どの時代でも常に考え得る。そのため、変化が訪れたとしても揺るがない基盤というものを形成し、影響を受けたとしても再生可能な町であり続ける地域力を培っておくことが重要である。

古在によれば、地域における人間システム(すなわち、地域コミュニティ)に関するサステナビリティは、生活の質 (quality of life、以下 QOL)、言い換えれば「衣食住」「心身の健康」さらには「生きがい」の質に関係している。心の豊かさと環境の豊かさをともに与えるまちづくりを行うことで、人々の QOL の上昇感を促し、そ

れに連動する形で地域のサステナビリティが強化されるということである。今後長いスパンでみて地域における生活や環境とともに、それを支える役目を果たすであろう“絆”とその形成システムを守っていこうとする意識を喚起させるべく地域コミュニティと人とのサステナブルな関係を築いていく力(サステナブルな地域力)を培っていかねばならない。

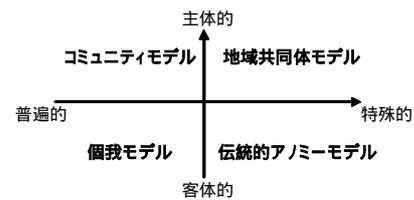
3) 回路の多様性

学生が大学生活において獲得するネットワークは多種多様である。それには基本的なタテとヨコの関係だけでなくナナメの関係があることが明らかになったが、もちろんインフォーマルグループで得られる連帯感、“絆”だけが必要だというわけではない。むしろタテとヨコの関係から生まれる絆のほうがより一般的である。ただ、そのタテとヨコの軸で作られた絆だけでは埋められない隙間の部分にナナメの“絆”が有用なのである。よって、どれかひとつの紐帯形成回路があればいいというわけではなく、その多様性が必要なのである。

《地域コミュニティとその取り組みのあり方》

1) コミュニティの変容

奥田は、コミュニティの進化がどのように進んでいくかということ、現実のコミュニティの類型化の作業を通じて明らかにしようとした。「主体 - 客体」「特殊 - 普遍」の二軸により4つのモデルを提示しつつ、住民類型・住民意識・住民組織・地域リーダーの4点がそれぞれ異なっていることを指摘、「あるべき」コミュニティへの変化の内実を示した。



地域共同体モデル：構成員の参加意欲は高いが、多くの因習的制約もある上にプライバシーも確保されず、新たな成員の参加に対してきわめて高い閉鎖性を持つ。いわばムラ社会。

伝統的アノミーモデル：都市化しつつある郊外における旧住民と新住民の軋轢状況を想定したものである。多くの住民が静観・放任の姿勢となり、旧住民が、行政により任命されるさまざまな役職を通じてリーダーとなる。

個我モデル：戦後民主主義教育の影響もあり、権利意識が高く、行政に生活改善を要求することを当然の権利と意識する住民によってコミュニティが構成。政治的にも相対的に成熟しているため組織化も早く、集団として行政に働きかけるスタイルを取る。

コミュニティモデル：自らをまちづくりの主体と位置づけ、コミュニティに必要なさまざまな事柄を自らの手で実現していこうとする。組織化も、「なにが必要か」という観点からなされ、さらに進んで、課題ごとに組織化やリーダー創出がなされる。また、新たな住民に対しても開放的である。

現在の〈箱崎〉に関しては、伝統的アノミーモデルに最も当てはまると考えられる。奥田は、暗にコミュニティが から に向かって段階的に発展していくことを想定していた(角、2005)が、100年近くまちの大きな柱であった九州大学の移転という急激な変化をむかえ、〈箱崎〉は コミュニティモデルへの急速な質的変容を求められている。そのためには、インフォーマルグループだけでなく、地域コミュニティ全体が当事者としての自覚と役割認識をもち、主体的にまちに関わる意識が必要となる。

2) アクター同士の協働

地域コミュニティを構成する大きな要素(アクター)には、行政・地域住民・商店街・大学/学生・企業・飲食店などさまざまなものがある。それぞれのアクターのなかに、さらに色々なアクターが含まれており(例えば、地域社会のなかに地域住民、伝統的な寺社や神社、NPOなど)地域コミュニティは複合的に形成されている。また、ひとつひとつ目的、形態、活動内容などバラバラに見えるが、実はテーマや背景などで重なっている部分がある。それぞれのアクター同士が協働をはかることによって、より規模の大きい効率的なまちづくり・交流・絆形成ができると考えられる。アクター同士の紐帯も生まれ、個々の紐帯だけの地域に比べて今後のまちづくり自体が確実に太く強い結びつきのあるものへと発展していくであろう。

例えば、行政+地域、地域+大学、大学+行政といった協働のほかにも、今回の事例には見られなかったが、+企業など第4、第5のアクターとの協働、さらには2つに限らず地域+大学+企業など複数のアクターの組み合わせを考えるのも有用だと思われる。

3) 他地域への応用

学生との関連という視点でも欠くことのできない重要な役割を果たしている地域コミュニティが姿かたちを変えるだけでなく、今後も急速に縮小していくことが予測される〈箱崎〉であるが、もちろんこのような地域の消失の原因となり得るのは移転だけではない。全国各地で大型ショッピングセンター・コンビニ・ファミリーレストランの出店や道路整備によるファスト風土化(三浦、2004)すなわち均質化による地域社会の蒸発と

もいえる現象が起こっているのだ。

今回の〈箱崎〉に関する分析と考察は、学生街という特色をもつ地域が大学移転問題に直面して縮小しつつあるという背景があって行ったものである。当然、今回明らかになった〈箱崎〉地域の機能と、その他の地域の機能は必ずしも一致するものではない。それはその土地なりの歴史や文化、そしてさまざまな特徴によって異なるものだからである。しかし、地域コミュニティというものがなんらかの役割を果たしていること、そしてそれが潜在してしまっている可能性、失われたときにあらわれるであろう影響の大きさなど、他の地域コミュニティにも共通するものがきっとあるはずである。

これを1つのケースとして終わらせるか、温泉街や農村など異なる特色をもっている他の地域コミュニティに応用していくかが、現在日本全国で消え行く古き良きまちを消失させるか、あるいは再生させるかの分かれ道になるかもしれない。

地域再生のために、今回のような前例に示唆される課題を糧にそれぞれの地域コミュニティが地域全体で自ら課題解決あるいは発展のためにそれぞれの形で取り組んでいかなければならないであろう。

6. 主要参考文献

- * 岩淵慶一『マルクスの疎外論 その適切な理解のために』時潮社,2007
- * 奥田道大『都市コミュニティの理論』東京大学出版会,1983
- * 倉津進『コミュニティ論 地域社会と住民運動』放送大学教育振興会,1998
- * 作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』筑摩書房,2004
- * 野沢慎司編・監訳『リーディング ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房,2006
- * 森岡清志『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会,2000
- * 森岡清志『都市社会の人間関係』放送大学教育振興会,2000
- * F.W.テイラー,上野陽一訳・編『科学的管理法』産能大学出版部,1969
- * G.A.ヒラリー,山口弘光訳「コミュニティの定義」鈴木広記編『都市化の社会学』(増補版),誠信書房,1978
- * K.マルクス,城塚登・田中吉六 訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫,1964
- * G.E.メイヨー『産業文明における人間の問題』日本能率協会,1951